

■ 巻頭言 ■

川崎富作先生の生誕 100 周年にあたって

松原知代

獨協医科大学埼玉医療センター小児科／
第 57 回日本小児感染症学会総会・学術集会会長

川崎病の発見者である川崎富作先生は 1925（大正 14）年 2 月 7 日に東京浅草でお生まれになり、2020 年 6 月 5 日に享年 95 歳でご逝去なさいました。今年は生誕 100 周年にあたります。先生と皆様と一緒に盛大にお祝いの会をしたかったと少し残念な思いです。

先生は 1948 年、千葉医科大学医学専門部（現千葉大学医学部）をご卒業し 1950 年からご定年まで日本赤十字社中央病院（現日本赤十字医療センター）に勤務されて、川崎病を発見なさいました。「臨床は教科書から教わるのではなく、患者から教わる」といつもおっしゃっていたそうで（Memorial book より）、その姿勢があったので新しい疾患を発見できたのだと思います。

第 1 例目は 1961 年 1 月 5 日に発熱で入院の 4 歳 3 か月男児で「頸のリンパ節が腫れて、眼が赤くて、唇が切れて血がでていて、からだに猩紅熱と違う赤い発疹があった」そうです。妥協せずに教科書にある疾患のどれにもあてはまらないと「診断不明」と記載され、翌年 1962 年 2 月夜に 2 例目となる患者さんに出会われました。敗血症として入院依頼で搬送された患者さんがまったく同じ所見で、「毛布を外して顔を覗きこんだたん、「あっ」と声をあげてしまった」（「川崎病は、いま」木魂社より）とお話されていました。先生のご講演のなかではこのくだりがいつも印象的でした。6 年間の 50 例をまとめて「アレルギー 1967；16：176-222」にご発表なさいました。冠動脈病変以外の合併症を含むほぼすべての症状が詳細に記載されています。川崎富作先生が設立なさった特定非営利活動法人日本川崎病研究センターのホームページ（https://kawasaki-disease.org/?page_id=32）からダウンロードできるので、若い先生方にはぜひご一読を薦めます。原著はカラーで掲載され月給 3 か月分の費用がかかったが、小児科医である奥様（禮子先生）がご快諾されたのは有名なエピソードです。1970 年に第 1 回全国疫学調査が実施され、予後良好が多いが冠動脈瘤ができ血栓性閉塞により突然死する例があることが判明しました。1974 年に英文で「Pediatrics 1974；54：271-276」に発表され世界中に認知され、1979 年の Nelson Textbook of Pediatrics に新しい疾患として初めて記載されました。

川崎病が戦後に出た新しい疾患であるという仮説をたてて、UCSD (University of California, San Diego) の Jane Burns 先生の研究チームが、川崎富作先生をはじめ発見時に関わった先生方にインタビューする旅があり、私も通訳を兼ねて同行しました。その成果は川崎病発見の歴史として「Kawasaki disease : A brief history. Pediatrics 2000 ; 106 : E27. doi : 10.1542/peds.106.2.e27.」に掲載されました。

川崎病の全国疫学調査はその後も継続されています。年々患者数と罹患率が上昇していましたが、新型コロナウイルスパンデミックで患者数が減少し、最近再び増加するという今までと異なった推移をしています。治療の進歩に伴い冠動脈病変併発例は減少しましたが、最近はまだ難治例が増えてきて、新しいフェーズにいる実感があります。病因・病態の解明および新しい治療の開発など課題はたくさんあると感じています。

この記念すべき年に、第57回日本小児感染症学会総会・学術集会の会長を務めさせていただけることは大変光栄に存じます。「こどもたちの明るい未来のために一遺伝子・感染・免疫を理解して症例から学ぶ」をテーマに、川崎病研究の第一人者であるUCSDのJane Burns先生や基礎の研究者の先生方も招聘し、日常診療から難治疾患まで幅広い分野の企画を行います。会期は2025年11月8日(土)・9日(日)、会場は千葉県浦安市のディズニーランドオフィシャルホテルであるグランドニッコー東京ベイ舞浜で、オンデマンド配信も行う予定です。

たくさんの皆様のご参加を心よりお待ちしております。

* * *